

「日本宗教史」を大学でどのように教えるか

代表者・司会 星野英紀

コメンテータ 石井研士

「日本宗教史」の教え方

——特に仏教の論じ方と関連して——

石 上 和 敬

大学の教養科目で「日本宗教史」を講ずる際の問題点と、それに対する対策等について、授業を担当する立場から私見を述べる。なお、発表者は仏教研究を専門とする教員であり、実際の授業においては、仏教に割り当てる時間が相対的に多くなっていることを前提とした論述である点、ご理解を賜りたい。論じ方としては、最初に発表者の感じている問題点を挙げ、その各々について、発表者が行っている対策、また、今後の課題等に論及する。

一 日本宗教に関する学生の知識量にバラつきがあること
 学生が日本宗教に対してどの程度の知識をそなえているのかは、授業の前提としてまずは把握しておかなくてはならない点である。一般に、高校時代に日本史や倫理を履修した学生はある程度の知識を持っているが、日本史未履修者などは授業遂行上、不可欠と思われる基礎的な知識も有していないこともある。そこで、発表者は、各授業のはじめに高校の日本史教科書の関連箇所のコピーを配布して、高校生レベルの知識を確認、

共有した上で、授業に入ることにしている。倫理教科書は日本史教科書に比して説明が丁寧であることから、簡単に知識を確認するという右記の目的にはそぐわない印象を持つ。

二 授業内容が、発表者の専門である仏教に無意識のうちに偏ること

発表者が仏教研究者であり、また、勤務大学も仏教系であるため、どうしても、仏教を中心とした内容に偏りがちである。この点、次のように心がけている。神道などの他宗教との相互関係に意識的に目を向けること、また、世界史(特に東アジア史)のなかでの日本宗教という視点を重視し、対外関係史とも関連させながら捉えるよう努めている。

三 古代、中世の説明に比重がかかりすぎることに

日本史や世界史を学ぶ際、近現代に行きつく前に年間の授業が終了してしまうことは珍しくないが、日本宗教史の場合にも、同様の問題が生じがちである。特に日本宗教史(特に仏教史)の場合、学生に馴染みのある事柄が古代、中世に集中しているため、その時期を扱う授業は学生の反応もよく、教員もそれに引きずられがちである。さらに、日本仏教史では、鎌倉新仏教中心史観とも呼ばれる、鎌倉新仏教こそがもともとそのれた仏教の形態であり、それ以降の日本仏教は徐々に本来の精神を見失い、見るべき点も多くはない、という認識が暗黙のうちに共有されていることもあり、余計に、江戸期以降の内容が手薄になりがちである。この点の克服は、極めて重要であると考ええる。対策として、江戸期以前の仏教は、どちらかといえば、文化財や知識として我々に馴染みのあるものが多いけれども、

江戸期以降は、たとえば、檀家制度の定着や明治以降の教育分野へのキリスト教の進出など、現代人とのつながりという点ではより身近に感じられる側面も少なくない。このように、現代にも連続する宗教という観点から、近世、近代の仏教に対しても学生の関心を惹起するべく務めている。

四 学生の信仰に配慮すること

客観的に日本宗教史を講ずるように心がけていても、宗教史を担当する教員は特定の宗教とかかわりの深い人も多く、教員個人の信仰と客観的な授業内容とは、常に緊張関係にあると思われる。また、学生の信仰様態も多様であり、この点、十分な配慮が必要である。特に、専門的な授業の場合には、かなり丁寧に説明することが可能であるため誤解も少ないであろうが、概論的な宗教史の場合、個別の宗教事象についてそれほど長い時間を割くことはできないため、簡潔な表現を心がけるあまり、誤解を招く場面もあるように感じられる。いよいよ慎重な配慮が必要であろう。

「日本宗教史」の教え方

——特に一神教の論じ方と関連して——

小原 克博

日本宗教史を教える科目として宗教学5「日本文化の中の宗教——古代からグローバル時代に至る宗教のポリテクス」(全学部向け)を担当している。最初にシラバスの一部を紹介

し、次に、この授業の特徴点を述べる。

シラバスより抜粋。「この授業では、日本宗教の成り立ちやその基本的な思想・世界観を学びます。その際、古代世界からグローバル世界までを時代背景として、日本宗教が文化や政治とどのような相互関係にあったのかを考えていきます。(中略)この授業では伝統的な日本宗教として、神道、仏教、儒教、道教、民俗宗教を取り上げます。仏教、儒教、道教は中国・朝鮮半島経由で日本に入ってきた外来宗教ですが、それ以前にあった日本の土着の伝統と相互に影響を及ぼし合いながら、日本宗教の多様性と一体性を形成してきました。また、古代世界の頃から、宗教は共同体や社会と深い関係を持っています。仏教が国教的役割を果たした時代もありました。宗教の教えの側面だけでなく、宗教のポリテクスについても、この授業では重点的に扱っていきます。

明治期以降、日本社会は欧米の視線を強く意識することになり、それは日本宗教にも大きな影響をもたらしました。キリシタン弾圧以降、キリスト教との再度の接触も、この時期に本格的に始まります。この授業では、日本宗教を一国史の中で自閉的に語るのではなく、世界史的な比較の視点を導入していきます。キリスト教をはじめとする一神教の伝統は、日本宗教とはかなり異なる性格を持っています。しかし、そうした一神教の歴史観や自然観をも視野に入れることによって、日本文化に根ざした歴史観や自然観を、より客観的に見ることができるようになります。この授業では、そうした比較宗教学視点を通じて、そもそも「宗教」とは何なのか、ということについても理